

令和元年度 第3回四万十市文化複合施設整備検討委員会

協議内容及び結果

【日 時】 令和元年 10 月 31 日（木）19:00～21:00

【場 所】 四万十市立中央公民館 2 階 大ホール

【出席者】 （委員）16 名 （事務局）9 名

【協議内容及び結果（要旨）】

1 前回議事録の確認

委員に事前に送付している議事録について不備等がある場合、11 月 7 日までに事務局まで連絡すること。

2 基本設計について

(1) 市民説明会及び市民ワークショップの報告について

事務局より、9 月 17 日に開催した市民説明会にて、市民よりいただいた意見及びそれに対する回答について報告。

また、10 月 3 日に開催した第 1 回市民ワークショップ及び 10 月 17 日に開催した第 2 回市民ワークショップについて報告。

第 1 回では、「劇場・ホールを「知る」」というテーマで、近年の新しいホールの使い方などを紹介し、大・小ホール、各諸室への意見をいただいた。第 2 回では、「空間の使い方を考える」というテーマで、体験型ワークショップとして、実際に舞台設備や空間の広さを体験していただき、空間の使い方を議論した。2 回のワークショップを通じ、大ホールに関しては、座席数よりも快適性や機能・収納の充実、市民が使いやすい小規模でも使えるホールという意見を複数いただいた。

[主な意見等]

・ワークショップに参加したが、一人ひとりが考える時間があって良かった。グループワークと違い、強い意見だけでなく、色々な方の柔らかい意見が聞けてよかった。わくわくした感じで、また参加したくなるようなワークショップだった。

(2) 大ホール座席数の比較検討について

事務局より、まず、本市及び近隣施設の大ホールの利用状況について説明。本市文化センターでは自主事業は行っておらず貸館事業のみ。高校の発表会等で満席になることはあるが、その他で満席になることはなかなかない状況。近隣の施設につ

いても、満席になることはほとんどない。

続いて、プロモーターへのヒアリング結果について報告。興行場所を選ぶ基準は座席数で、席数が多いほうが採算面で有利なうえ、興行の幅も広がるとのこと。ただ、自主事業であれば850席でも問題はなく、自主事業で興行を行っているところはたくさんあるとのこと。また、四万十市に1,000席のホールができたとして年に何回興行に来てくれるかとの質問を3社にしたところ、「全く分からない」、「頑張って1回程度」、「4回程は行きたい」とのこと。貸館や興行を考えるより、自主事業の充実が大事であり、席数だけに拘らず観光など色々な視点から施設運営や自主事業を行っていくうえで、市に適した席数とすることが一番。自主事業を頑張っていれば自然と人が集まる。四万十市は、四万十川のブランド力も高いので、設備が充実したホールができれば声をかけやすく売っていきやすい場所でもあるとのこと。

これ等のことも踏まえ、大ホール座席数1,000席程度と850席程度の場合の比較検討について説明。両案の差を共用部分で面積調整した場合、約300㎡程度調整が必要。共用部として使える部分のうち、通行等に必要となる部分を除いた溜まれる場所・家具などを置ける場所は、1,000席程度にするとあまり確保できず、850席程度であればある程度確保できる。約300㎡を仮に創造支援諸室で調整する場合は約24%削減が必要で、ホワイエで調整した場合、満席時に全員が一度にホワイエへ出た場合の密度が850席程度で0.75㎡/人、1,000席程度で0.5㎡/人となる。ワークショップで0.75㎡/人の密度を体感してもらったが、ホワイエにばかり面積を割くのはもったいないがこれ以上狭くなるのはどうか、という感想をいただいた。興行等の可能性については、1,000席程度の方が有利となるが、延床面積の上限がある中で、ホワイエや共用部の空間の豊かさ、イニシャルコストやランニングコスト、市民利用の観点、舞台から最後部の席までを考慮した演出空間等、ほとんどの項目で850席程度の方が有利となる。ワークショップでも、1,000席程度という意見よりも人口や地域にあわせた800席程度の方がよいという意見が多かった。また、席数確保より、ゆとりや居心地、四万十市らしい、特徴的なホールという意見が多数寄せられた。

今回、共用部に市民の居場所的スペースをとれた場合どのような使い方ができるか、イメージしやすいよう例示した。

[主な意見等]

- ・共用部の説明資料の活動の根拠はなにか。本当にこのように使ってもらえるか。
→（事務局回答）現段階ではこのように使っていただけののではないかというイメージ。使い方については、ワークショップでも新しいアイデアが出てくると思っている。色々な居場所をつくることが大事と考えている。
- ・様々なワークショップからそのような話があるか。
→（事務局回答）自由に使える場所や日常の居場所が欲しいとの意見が多い。市民からの意見にあわせて計画も変えていこうと思っている。
- ・具体的な使い方については、言いづらい方（例えば学生など）もいると思うので、

市民の意見をすくってあげて設計に生かしてほしい。

- ・大ホールだけを考えると、1,000席あれば大きな催しなど市外からも人が来てまちの活性化につながる、また興行の幅にも影響するとの思いから、大きいホールを望んできた経過がある。仮に自主事業に予算がつき大きな催しができるのであれば、850席でもよいのかもしれない。現在は自主事業ゼロという中で、今後はどう考えているか。
→（事務局回答）自主事業について現時点で予算や本数は言えないが、必要だと考えている。それは、1,000席でも850席でも同じだと考えている。
- ・席数は少なくとも、お年寄りから若者までゆったりできる共用部がある施設がよい。人口も減っていくなか、施設を維持していかなければならないので、席数より自分たちにとって使いやすい施設にするのが重要。楽しい事があれば人は動くので、人が集まれる空間が充実していることが重要。市民が集える空間をつくるという点でも、席は少なめでよいと思う。
- ・他のスペースに影響があるなら850席でよいと考えるのか、そういうことに関係なく、このまちにふさわしい席数として850席がよいのか、考え方が2つある。スペースだけの議論ではなく、元のところをはっきりさせないといけない。
- ・市民憲章に四国西南地域の文化の発信地と書いてあり、文化施設として恥ずかしくないものにする必要があると思う。集客圏域は周辺地域を含めると14~15万人程の人口があり、決して1,200席でもおかしくはないが、少なくとも1,000席あれば色々なイベントが打ちやすいと聞いた。未来の子供たちのことを考え、色々なステージが見られることが大事で、1,000席必要と考える。
- ・現実論として、共用部との比較の議論をせざるを得ないというのものもある。それから、文化創造・発信を充実させるには850席よりやはり1,000席であるべき、ということをしちんと議論してもらいたいということもあると思う。一方で、プロモーターがイベントを呼んでくるので1,000席という議論は少し危ういと感じる。プロモーターヒアリングでそのあたりの話はあったか。
→（事務局回答）興行を期待するより、自主事業などでどれだけ地域が頑張れるか、市民利用に重点をおいて、市民など利用者の意見を重視して決めたほうが良いのではないかという意見だった。営業だけを考えると席数は多いほうがよいが、地域が盛り上がるのが大事で、盛り上がっている地域には興行も集まる、という意見をいただいた。
- ・造ったからやっつけてくださいではプロモーターも困るということかもしれない。市民からは自分たちでするなら規模は小さいほうがよいという話もあった。
- ・850席と1,000席では大差ない。ライブを企画したこともあるが、1,400人入れても赤字だったこともある。消防に問合わせると1㎡4人までスタンディングが可能で、土佐清水市のホールは前の席が移動でき、スタンディングができる。同じようなことができないか。そうすれば、もう少しできることも増えるのではないか。

- （事務局回答）スタンディングにした場合、単純に前の席を立たせると、後ろの席は見えなくなるため、床を下げるなどの工夫が必要。床面積は増えないので検討してみたい。席数の議論が落ち着いてから、次のステップとして検討する。
- ・ 850席を推している。面積の上限がある中では、1,000席確保はかなり無理した計画になり、850席の方がより自然に感じる。観客が半分以下になるようであれば、適切な規模ではないと思う。メンテナンスなど見えないコストもかかり将来の制約になるのではないかと思う。他よりも秀でることよりも、周辺市町村と協力して事業を呼ぶなど、自主事業なども連携体制をとれる方が、持続の可能性があるのではないかと感じ、850席の方がよいと考えている。
 - ・ はじめは1,000席がよいと思っていたが、ワークショップに何回か参加してみて皆さんの意見が違うのだと思った。どんなに良い催しでも、なかなか人は集まらない。仮に1,000席のホールをつくっても、2～3万円のチケットでは誰も来ないのではないか。後ろの席に立見席があり、850席程度であっても立見ならもっと入るといふこともあればよいと思う。

[協議結果]

立見席やスタンディングなどについては、席数の規模が決まってから検討していく。現実として人口減少時代の中で、我々がいかに価値をつくっていくか。席数がどちらになっても我々が残していく将来を考えなければならない。多くの方の意見を直接聞くことも大事なので、第3回のワークショップは委員もできるだけ参加する。

(3) 基本設計の進捗状況について

事務局より、現状の検討案・進捗状況について説明・報告。プロポーザル提案から変更した部分は、備品庫の確保を検討、搬入車路の屋外化により屋根はあるが面積に入らない工夫、国道側と五月公園側の1m以上のレベル差処理の検討、J A受付の待合をロビーと一体利用とする検討など。また、工事中も残されるJ A本館との干渉による建物寸法の調整、大ホールトイレに係る共用部分との兼用検討、機械室その他について検討している。大ホール客席の提案として、小さい規模でも使いやすい、四万十市らしい特徴あるホール、という市民の意見と、細く狭くなっているホワイエの解消のために客席の奥行きを縮め横幅を広げてボトルネックの角を削ることを検討している。これにより、ホールの中は舞台から後方席までの距離も短くなるうえ、舞台に対し囲み配置的となり、全席が舞台中央へ向いた一体感のある客席ができる。小規模に使用したいという意見に対し、小規模利用でも違和感がない客席の配置について検討中。その他、小ホール・創造支援諸室・共用部についても同時並行で検討している。